

母性看護学における効果・効率・魅力を重複させた授業設計

Design of maternal nursing with overlapping effects, efficiency, and attractiveness

中島 奈美^{1) 2)}

Nami NAKASHIMA

京都府立医科大学 1)

熊本大学大学院 2)

Kyoto Prefectural University of Medicine Kumamoto University Graduate School

〈あらまし〉母性看護学各論において授業設計を行い、2020年度前期に遠隔にて実施した。授業は、課題が中心であり、看護アセスメントを妊婦事例で4回、子育ての詩歌エッセイ鑑賞作成を4回行った。授業評価アンケートの結果では「共に学べる」「直接参加できる」と評価された。学生は、アセスメント能力に段階的に自信をつけた。設計について、効果的・効率的・魅力的を重複させて振り返った。効果的・効率的な設計では「学習目的を中心に据えて内容の選抜をする」、効率的・魅力的な設計では「学生が主体的になる仕組みをつくる」、魅力的・効果的な設計では「学生が気づく機会をつくる」ことに今回の設計はつながったと考えられた。次回の設計では、eラーニング化するとともに、1ブロック目の学習支援を丁寧に行えるようにする。

〈キーワード〉 高等教育・遠隔教育・学習授業実践 看護教育・自己学習力

1. はじめに

授業において、学習の効果的・効率的・魅力的を求めて設計することは、インストラクショナルデザインの基本であると同時に、その学習を尊重することになると考える。2020年度前期、筆者は大学で担当する母性看護学各論の授業設計と実施をした。設計の意図は2つあり「構成をブロック化し、繰り返しによって言語情報と知的技能の習得支援をする」「共同学習を気づきと相手を尊重する態度、認知的方略の学習機会にする」であった。内容は3つの課題で構成した。①妊婦事例の看護過程の展開4回、②母子に関する詩歌エッセイ鑑賞作成4回、③母性実習事前学習であった。実施は急遽遠隔になり、学生の課題完結率は98%~100%であった。学生の看護アセスメント能力の自己評価は段階的に上昇した。

今回の授業設計を効果・効率・魅力を重複させて振り返り、次回の設計を考察する。

2. 学習の効果・効率・魅力と設計

2-1 効果的・効率的な設計と学習目的

科目の終了時に習得を目指したのは「妊娠期の看護アセスメント能力の獲得」であった。学習目的が定まると必要な内容の選出が可能になり、学習成果に合わせた教授方法を選択できた。看護アセスメントを行うには、専門的知識と看護的思考が必要であり、これらは言語情報と知的技能である。繰り返しによって習得支援ができる。回を重ね専

門性が定着深化すればアセスメント内容も深くなる。講義形式での知識伝達を全く行わないことに不安はあったが、学生のこれまでの学習経験と意欲を信頼して設計をした。

2-2 効率的・魅力的な設計と主体的になれる仕組み

魅力的な教材が内発的動機付けを可能にし、効率的な学習に導く。習得してほしい「妊娠期の看護アセスメント能力」は1年後の母性実習に必要なスキルである。現在の学習に近い将来の自分の経験を豊かにする、肯定的な動機付けになることを意図した。詩歌鑑賞作成は、自身の事として感じ考えることを促す。そのため学生が主体的になれると考えた。また「良い、悪い」「できる、できない」等の二分性の見解を手放すことを意図して、事例と詩歌を並走する設計にした。

2-3 魅力的・効果的な設計と気づく機会をつくる

学習内容の不十分な点を、自ら気付けば学習になりやすい。また自分の良い点、できていることに自身では気付きにくいように感じる。身近な人との比較と肯定的なフィードバックの機会として、課題は個人での実施後にペアによる共同学習の機会を設けた。相手のできていること、良い点を具体的に伝えるように教授した。また、ペア学習後に気付きを表に整理して明確化を促し、次回に活かせるように設計した。

3. 授業実施の概要

3-1 時期と対象

科目は大学看護学科2年生85名が対象で、2020

年前期母性看護援助論 I 全 15 回であった。学習目標は「1.妊娠期の母子の看護アセスメントができる」「2.妊娠期の母子に自分ができる看護が言語化できる」であった。

3-2 3 種類の課題の内容

準備した課題は以下であった。

課題①妊婦事例の看護過程

ペーパーペーシェントでの看護過程展開を実習の記録用紙を使用して行った。設定した期限になったらペア学習に移り、相手に説明を行い、相手のアセスメントを聞いて、肯定的なフィードバックをお互いに行った。その後、気づいたことを ARCS モデル表に書き込み、ルーブリックで自己評価した。この一連を、事例を変えて 4 回行った。事例は段階的に複雑化し看護アセスメントの難易度が上がるよう設計した。

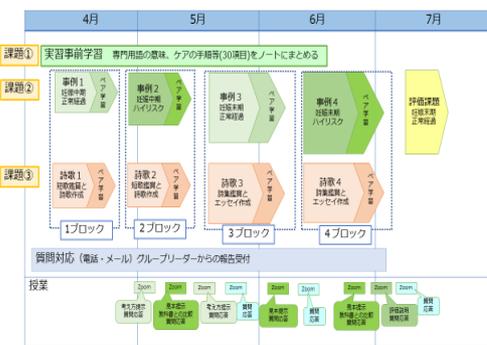
②母子に関する詩歌鑑賞

母親の視点に関する短歌と子どもの視点に関する詩集の鑑賞と制作を 4 回行った。毎回制作後ペアで互いの内容を紹介し、その感想を記述した。

③事前学習

母性実習で必修の基礎的知識 30 項目をノートにまとめた。

図 1 母性看護学各論授業全体の設計概要



3-3 実施方法

課題はすべて印刷物で 4 月に配付した。質問対応、進捗確認はメールと電話で行った。5 月より授業配信が可能になり 9 回の zoom 授業で質問対応、見本や考え方の提示を行った。成績評価は課題の提出と内容、事例のアセスメントを再考したもので行った。

4. 結果 授業評価

4-1 課題完結率は 98~100%

課題の完結率は、事前学習は約 99%、事例は約 98%、詩歌は 100%であった。

4-2 授業後アンケートの結果

科目終了時に授業アンケートを行い、回収率は 76.4%であり、その中の有効回答率は 86.1%であった。

4-2 ①アセスメント自己評価の段階的な上昇

最終課題の出来を 100 点にした場合、それまで 4 回のアセスメントの自己採点を求めた。その平均点は、1 回目 53.0 点、2 回目 65.7 点、3 回目 75.4 点、4 回目 82.8 点であった。Friedman 検定で上昇が有意であった。(P<0.05)。

4-2 ②遠隔で共に学び喜べる授業

本科目と他の科目の授業内容について、13 項目をアンケートで「はい」から「いいえ」までの 4 件法での回答を求めた。13 項目全てにおいて、本科目の評価点が高く、サイン検定 12 項目は差が有意差であった。「共に学び、共に喜べる授業、課題であった」「授業に直接参加する機会があった」「授業の初めに成績評価基準をきちんと説明した」が特に高い評価であった。

5. 考察

5-1 課題中心授業の適応性の高さ

授業は遠隔での実施になったが、アンケート結果から学生評価は良かった。流動的な学習環境の中でも課題中心学習の適応性の高さによって、必要な学習を支援できたと考える。

課題中心の設計であるため、この授業は e ラーニング化が可能である。事例の提示において、電子カルテのフォーマットを使えば、臨床現場を感じる学習になり、実習で活かせるスキルが身につく。次の設計では、この点を改善し教材の魅力が増すようにする。

5-2 ブロック化の構成と段階的支援の工夫

学生のアセスメント能力への自信は、段階的に向上した。繰り返しのよって言語情報、知的技能が定着したと考える。1 ブロック目は学生が試行錯誤段階であるうえ、課題が重複し負荷が高い。次回は、1 ブロック目の学習支援を丁寧に行えるように設計する。

参考文献

鈴木克明(2003)教材設計マニュアル 北大路書房
成田喜一郎(1997)社会科「叙情詩」論序説：事実認識と想像力をつなぐ試み(社会科)研究収録集東京芸術大学附属大泉中学校(38):39-54